

〔研究ノート〕

## ソーシャルサポートの衡平性と ソーシャルスキルとの関連<sup>1)</sup>

田中 健 吾<sup>2)</sup>

### 要旨

本研究は、ソーシャルサポートの衡平性とソーシャルスキルの関連について検討することを目的とした。大学生193名を対象とした調査によって、ソーシャルサポートの入手量と提供量の差（衡平性）を「認知レベル」と「実行レベル」に分けてとらえ、それぞれの衡平性とソーシャルスキルとの関連について検討した。ソーシャルサポートの衡平性が、ソーシャルスキルのどの様な特徴によって規定されるのかを検討するために、KiSS-18で測定した能力的側面を反映する「全般的なソーシャルスキル」得点、および、ENDEで測定した行動的側面のスキル、「記号化スキル」と「解読スキル」の各得点を独立変数に、サポートの衡平性を従属変数とする重回帰分析を行ったところ、以下の知見が示された。1) 解読スキルが高ければ認知・実行のレベルを問わず、サポート提供量が増加する、2) 記号化スキルが高ければ、入手量が増加する、3) 能力的側面でのソーシャルスキルが高ければ、実行レベルでサポートの提供量が増加する。以上から、サポートの授受それぞれについて、異なる行動的側面を持つソーシャルスキルが機能していること、および、行動的側面と能力的側面によるソーシャルスキルのとらえ方によって、サポートの衡平状態への影響が異なる可能性が示唆された。

キーワード：ソーシャルスキル、ソーシャルサポート、衡平性、大学生

### 問題と目的

近年の心理学的ストレス研究では、他者からのソーシャルサポート<sup>3)</sup>による心理的ストレス反応低減効果が広く認められ（Cohen, Underwood, & Gottlieb, 2000）、この低減効果を決定する重要な要因としてソーシャルサポートの与え手と受け手のソーシャルスキル<sup>4)</sup>の程度が注目されている（田中, 2002）。例えば、Richy, Lovell, & Reid (1991) は、ソーシャルサポートを得やすいソーシャルスキルを受け手に獲得させることによって、治療的

1) 本研究の実施にあたり、関瑞木さん（早稲田大学第一文学部心理学専修2001年度卒業生）の協力を頂いた。記して謝意を表する。

2) 著者連絡先：kengot@osaka-ue.ac.jp

3) ソーシャルサポートは、広義には「特定個人が、特定時点で、彼／彼女と関係を有している他者から得ている、有形／無形の諸種の援助」（南・稲葉・浦, 1988）であると理解されている。

4) ソーシャルスキルとは、人間関係を構築したり、維持することを適切かつ効果的に行うための「人付き合いの技術」であり、「対人場面において、個人が相手の反応を解読し、それに応じて対人目標と対人反応を決定し、感情を統制したうえで対人反応を実行するまでの循環的な過程である」と定義されている（相川, 2000）。

効果を上げる臨床的援助方略を明らかにしているし、Harzberg, Hammen, Burge, Daley, Davila, & Lindberg (1998) は、情動的サポートを他者に提供するソーシャルスキルの不足が、対人ストレス生成のリスク要因となることを明らかにし、与え手のソーシャルスキルに注目した考察を行っている。こうした先行研究から、心理的ストレス反応低減に有効なソーシャルサポートの授受に関わるソーシャルスキルについての検討の有用性は明らかであるといえよう。

一方、ソーシャルサポート研究では、ソーシャルサポートが人々の間で交換される資源であるとする社会的交換理論モデルによる検討が盛んである。社会的交換理論とは Homans (1974) が提唱した社会的行動全般を説明する理論である。人は自分の行動によって得られる報酬と、逆に自分の行動によってかかるコストのバランスをとりながら行動を選択しており、報酬を最大に、コストを最小にするように行動を決定するという考え方である。この理論の代表的モデルである相互依存性理論 (Kelley & Thibaut, 1978)、衡平モデル (Walster, Walster, & Berscheid, 1978)、および投資モデル (Rusbult, 1980) では、当人が相手との現在の対人関係における相互作用から得られる利益とコストを計算し、利益が多いほどその関係における満足度が高いと仮定している。Rusbult (1980) による大学生の恋愛関係の進展過程を追跡的に調査した研究では、投資モデルが関係の満足感や関与性に対し予測力をもっていることが確認されている。

こうした社会的交換理論モデルはもともと人間の社会行動の一般理論を目指したモデルであったが、特に恋愛関係や友人関係を中心とした対人関係のモデルとして注目を集めてきた。このモデルでは、人は対人関係における相手の報酬やコストを自己と比較し、公平であるか判断して、損得が同じ場合に満足や喜びを感じるを考える。例えば、老未亡人を対象とした衡平モデルによる研究を行った Rook (1987) は、ソーシャルサポートの観点から、社会的ネットワークと自己との関係が衡平であるほど、孤独感が低い傾向が認められている。

以上のようなサポートの受け手であり送り手ととらえる「互惠性」に関するソーシャルサポート研究が近年増加しつつある。このように、人間はソーシャルサポートの受け手であると同時に送り手でもあるから、サポートの衡平性とサポートの送受それぞれに関わるソーシャルスキルの関連を検討することは重要であろう。

しかし、ソーシャルサポートの衡平性とソーシャルスキルの関連については明らかにされていない。ソーシャルサポートのストレス低減効果をより詳細に理解するためには、ソーシャルサポートの衡平性と、衡平性を形成するソーシャルスキルとの関連を明らかにすることが必要であると考えられる。そこで、本研究ではソーシャルサポートの衡平性とソーシャルスキルの関連について検討することとした。

ところで、ソーシャルサポートに関する先行研究を概観すると、知覚されたソーシャルサポートと実際に行われたソーシャルサポートでは異なるメカニズムを経て、心身健康状態に影響を与えるとされている (福岡, 1997)。「知覚されたソーシャルサポート (perceived support)」とは、サポートを受けられるという主観的期待あるいは信念を抱くこと

であり、実際にサポートを受けたという事実を表す「受容されたソーシャルサポート (received support)」とは意味が異なる(種市, 2002)。とりわけ心理学的ストレス研究においては、前者の知覚されたソーシャルサポートが、心理的ストレス反応低減効果をもたらす重要な要因の1つであるといわれている(小杉, 1999)。このため、本研究では、ソーシャルサポートの入手量と提供量の差(衡平性)について、知覚されたソーシャルサポートを表す「認知レベル」と実際に行われたソーシャルサポートを表す「実行レベル」に分けてとらえ、それぞれの衡平性とソーシャルスキルとの関連について検討することにした。

また、ソーシャルスキルの検討に際しては、「能力的側面」と「行動的側面」の2つの構造的側面から検討することとし、それによってより詳細にソーシャルサポートの衡平性との関連が検討できるように努めた<sup>5)</sup>。

## 方 法

**調査対象：**4年制大学に在学する大学生193名を対象に調査を実施した。欠損値があった3名を除外した190名(有効回答率98.4%, 平均年齢=20.6歳, 標準偏差=3.23)を分析対象者とした。性別の内訳は男性76名, 女性114名であった。

**調査手続き：**大学の講義時間内に集団調査を実施した。回答時間は概ね15分前後で、即時回収した。

**調査票：**下記の尺度から構成される調査票を使用した。

(a) ソーシャルサポート尺度(福岡, 1997)：現在親しくしている同性の友人複数との関係を想起させ、①認知レベルのサポート(彼らにそれぞれの行動をどの程度してもらえらるか=入手可能性, 自分ではどれ程度してやれるらるか=提供可能性), ②実行レベルのサポートと(①で想起した友人との関係について, 過去1ヶ月間でそれぞれの

---

5) 社会心理学者は、行動的側面を強調し、「相互作用する人の目標を実現させるのに効果がある社会的行動」(Argyle, 1981)といった定義を行っている。一方で行動療法を専門とする臨床心理学者は、認知面あるいは能力的側面を強調し、「他者によって正または負の強化を受ける行動を発現させ、罰せられたり圧倒されたりするような行動をおさえる複雑な能力」(Libet & Lewinsohn, 1973)と定義している。

他者との効果的な相互作用をもたらすものであるという点では、両者とも一致しているが、「行動」と「能力」とでは、その性質が大きく異なる。例えば、会話スキルというソーシャルスキルを表すのに、「言語能力が高い」といえば、その高さは発した言葉によって評価されるが、そのような能力は言葉を発していないときでも一貫して安定的に個人に備わっている行動スタイルを指すものである。一方、「言語行動が多い」といえば、これは言葉を発したときにしか評価されない、特定の状況でどれだけ言葉を発したかという特異的な行動パターンを指すことになり、その人がいつもそうする傾向があるかどうかは分からないのである。つまり、ソーシャルスキルが「状態」的な構成概念であるのか、あるいは「特性」的な構成概念であるのかという点について、それぞれ異なる定義が存在しているということになる。このようなソーシャルスキルの定義における違いは、ソーシャルスキルを測定・評価する時には、特に十分注意すべき課題であると思われるため、ソーシャルスキルを「能力的側面」と「行動的側面」から測定評価することとした。

行動を自分がどれ程度してもらったか＝入手量，自分は何の程度してやったか＝提供量）について回答を求めた。それぞれ9項目（計36項目）で，回答は全て5件法である。

(b) ソーシャルスキル尺度 (KiSS-18; 菊池, 1988) : ソーシャルスキルの能力的側面を反映する全体像を把握する目的で使用した。質問項目は, 「会話を始める」, 「和解する」などの表現に見られるように, 具体的な行動が幾つか組合わさった高次な行動に関する質問から構成されている。そのため, ソーシャルスキルの全体像を把握するのに適していると言われている。回答は5件法で行われ, ソーシャルスキルが高い順に5点～1点が与えられるものである。各項目が複合的なスキルから構成されている18項目からなる5件法の評定尺度である。

(c) ソーシャルスキル尺度 (ENDE2; 堀毛, 1994) : ソーシャルスキルの具体的な下位構造, すなわち行動的側面を検討する目的で使用した。解読スキル・記号化スキル・統制スキルの3つの下位尺度, 各5項目（計15項目）で構成される5件法の評定尺度である。ただし, 本研究では性差に言及することは目的ではないため, 男女で構造が異なるとされる「統制スキル」尺度は分析から除外した。

## 結果と考察

### 各尺度の結果と関連

認知・実行レベルそれぞれにおいてサポートの入手量と提供量を9項目の合計得点で算出した。平均値と標準偏差を表1に示す。4尺度とも女性が高得点であったが ( $p < .01$ ), どの尺度においても同傾向であり, 入手量・提供量の差のみを問題とするならば性差の影響を特段に考慮する必要はないと判断し, 今回の分析では性差には言及しないこととした<sup>6)</sup>。これらの得点から, 認知レベル・実行レベルそれぞれについて, 入手・提供サポート量の差を求め, 「衡平性」の指標とした。この指標得点が正の値であれば, 入手量が多く, 負の値であれば, 提供量が多い。また0は衡平状態を表すものである。

表1・各尺度の平均得点, 標準偏差および尺度間相関

尺度名	N	M	SD	I	II	III	IV	V	VI	VII
I KiSS-18	190	55.9	11.6	—						
II 解読スキル	190	16.9	3.52	.52**	—					
III 記号化スキル	190	15.8	3.45	.61**	.34**	—				
IV 認知・入手 SP	190	23.8	8.44	.41**	.15*	.52**	—			
V 認知・提供 SP	190	24.1	6.93	.52**	.33**	.48**	.79**	—		
VI 実行・入手 SP	190	18.1	9.29	.20**	.06	.34**	.65**	.52**	—	
VII 実行・提供 SP	190	18.1	8.45	.35**	.21**	.37**	.58**	.63**	.76**	—

注) SPはサポート

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

6) こうした調査票による測定におけるソーシャルサポートやソーシャルスキルの自覚が女性において高いという結果は, 福岡・橋本 (1995) や福岡 (2001) と一致している。

尺度間相関は、4つのサポート尺度が全て有意な正相関関係にあり、 $.52 \leq r \leq .79$  と強い関連を示した。スキルとサポートの相関は、「読解スキル」と「実行レベルのサポート入手量」とが無相関である以外は、全て有意な正相関関係にあった。

### ソーシャルスキルとソーシャルサポートの衡平性の関係との関連

ソーシャルサポートの衡平性が、ソーシャルスキルのどの様な特徴によって規定されるのかを検討するために、KiSS-18で測定した能力的側面を反映する「全般的なソーシャルスキル」得点、および、ENDEによって測定した行動的側面のスキル、「記号化スキル」と「読解スキル」の各得点を独立変数に、サポートの衡平性を従属変数とする一括投入法による重回帰分析を行った。分析結果は表2に示した通りであった。

表2・衡平性を規定するスキル

(β)	サポートの衡平性	
	認知	実行
全般的スキル	-.09	-.20*
読解スキル	-.28**	-.15†
記号化スキル	.36**	.17
$R^2$	.13*	.07*
(R)	.36	.26

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

その結果、認知レベルのサポートの衡平性については、読解スキル、および、記号化スキルという2つの下位スキルの標準偏回帰係数が有意であった。一方、全般的なスキルを評定していると考えられるKiSS-18については、標準偏回帰係数は有意でなかった。これらの結果の詳細は表2に示した通りである。決定係数は実行レベルのサポートの衡平性においては極端に小さい値であったが、認知レベル・実行レベルともに有意水準 ( $p < .05$ ) をクリアしていた。

標準化偏回帰係数の正負からは、以下の3点が明らかとなった。1)読解スキルが高ければ認知・実行のレベルを問わず、サポート提供量が増加すること、2)記号化スキルが高ければ、入手量が増加すること、3)能力的側面でのソーシャルスキルが高ければ、実行レベルでサポートの提供量が増加すること。

以上から、サポートの授受それぞれについて、異なる行動的側面を持つソーシャルスキルが機能していること、および、行動的側面と能力的側面によるソーシャルスキルのとらえ方によって、サポートの衡平状態への影響が異なる可能性が示唆されたと言える。Harzberg, Hammen, Burge, Daley, Davila, & Lindberg (1998) は、情動的サポートを他者に提供するソーシャルスキルの不足が、対人ストレス生成のリスク要因となることを明らかにし、与え手のソーシャルスキルに注目した考察を行っている。Harzbergら(1998)によると、他者にソーシャルサポートを与えるソーシャルスキルに欠けている者は、次の

2つの理由から対人ストレスを生成しやすいという。A)サポートを希求しているのに得られない者との間に対人葛藤事態を引き起こす可能性がある。また、B)サポートを与えられないことで他者を怒らせてしまい、その結果引っ込み思案になり、自分がサポートを必要とする時に相互サポートが出来なくなる。この観点は、前述2)を支持するものであるといえる。

ソーシャルスキルの定義は、従来から「能力的側面」と「行動的側面」による異なるとらえ方が存在してきた。前者の立場では、個人に特異的な「特性」としてとらえているが、後者の立場では、状況や場面によって変化する場面特異的な“状態”としてとらえていることになる(田中, 2002)。本研究からは、ソーシャルサポートの衡平“状態”に2つの行動的(=状態的)水準でのソーシャルスキルの影響が示されている一方で、能力的な(=特性的)ソーシャルスキルについては、部分的に関与が認められるものの、ソーシャルサポートの入手可能性における衡平状態には、ほとんど関与していないことが示されている。「対人場面において、個人が相手の反応を解釈し、それに応じて対人目標と対人反応を決定し、感情を統制したうえで対人反応を実行するまでの循環的な過程である」と定義されるソーシャルスキルについて(相川, 2000)、行動として外顕化する「対人反応の実行」が他者の反応を引き起こすのであるから、ソーシャルサポートとして他者から供与される実際のサポートがこうした状態的ソーシャルスキルに関連することは当然の結果であるといえる。一方で、対人目標や反応を決定したり感情統制したりする認知的なスキルについての効果が現れないことは、ソーシャルスキルの獲得と実行の間に影響する他の要因の存在を示唆するものであると考えられよう。このようなソーシャルスキルという構成概念の持つ2面性は、ソーシャルサポートのみならず、その他心理的変数との関連を検討する上で、さらに吟味する必要があるものと考えられる。

なお、ソーシャルサポートに関してはサポート源の違いや、情緒的あるいは手段的といったサポート内容別の検討が行われる場合も多いといわれる(福岡, 2001)。こうした検討も今後必要であろう。

#### 引用文献

- 相川充 2000 セレクション社会心理学20 人づきあいの技術：社会的スキルの心理学 サイエンス社、東京。
- Argyle, M. 1981 Social skills and health. London: Methuen.
- Cohen, S., Underwood, L.G., & Gottlieb, B. (Eds.) 2000 Social support measurement and intervention: A guide for health and social scientists. New York: Oxford University Press. (小杉正太郎・島津美由紀・大塚泰正・鈴木綾子 監訳 2005 ソーシャルサポートの測定と介入. 川島書店)
- 福岡欣治 1997 友人関係におけるソーシャルサポートの入手と提供—認知レベルと実行レベルの両面からみた互恵性とその男女差について— 対人行動学研究, 15, 1-12
- 福岡欣治 2001 大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向—達成動機を媒介要因とした検討— 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 14(3)-2, 1-10.

- 福岡欣治・橋本宰 1995 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係教育心理学研究, 43, 185-193.
- Herzberg, D. S., Hammen, C. L., Burge, D., Daley, S. E., Davila, J., & Lindberg, N. 1998 Social competence as predictor of chronic interpersonal Stress. *Personal Relationships*, 5, 207-218.
- Homans, G. C. 1974 Social Behavior, Harcourt Brase Javanovich. (橋本茂 訳 1978 社会行動. 誠心書房)
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する. 川島書店, 東京.
- Kelley, H. H., & Thibaut, J. W. 1978 Interpersonal relations: A theory of interdependence. New York: Wiley.
- 小杉正太郎 1999 ストレス緩衝要因の研究動向. 河野友信・石川俊男 編 ストレス研究の基礎と臨床 現代のエスプリ別冊. 至文堂, 東京, Pp.163-172.
- Libet, J. & Lewinsohn, P. M. 1973 The concept of social skill with special references to the behavior of depressed persons. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 40, 304-312.
- 南隆男・稲葉昭英・浦光博 1988 「ソーシャルサポート」研究の活性化にむけてー若干の資料ー, 哲学, 85, 151-184.
- Richy, C. A., Lovell, M. L., & Reid, K. 1991 Interpersonal skill training to enhance social support among woman at risk for child maltreatment. *Children and Youth Service Review*, 13, 41-59.
- Rook, K. S. 1987 Reciprocity of social exchange and social satisfaction among older women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 145-154.
- Rusbult, C. E. 1980 Satisfaction and commitment in friendships. *Representative Research in Social Psychology*, 11, 78-95.
- 田中健吾 2002 ソーシャルスキル (Pp.59-74), In “ストレス心理学” (編著:小杉正太郎), 川島書店, 東京.
- 種市康太郎 2002 ソーシャルサポート (Pp.74-83), In “ストレス心理学” (編著:小杉正太郎), 川島書店, 東京.
- Walster, E., Walster, G. W., & Berscheid, E. 1978 Equity: Theory and research. Boston: Allyn & Bacon.